

小さい者に気をつけよ

奨励	榎本 栄次〔えのもと・えいじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団世光教会牧師

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

（マタイによる福音書 18章10―14節）

いちばんの人

私たちは迷ったり、失ったりすることについてどう考えるか。できるだけ迷うことなく、正しく、素直にいくと本当にいいと思います。私も毎日、そのことを求め、話し、また学んでいます。学んだり、教えたりするとき、迷わないようにまっすぐな真理を探しているということだと思うのです。しかし学ぶことは、ある意味で、迷うことかなと思ったりします。迷わない学びなどあるのでしょうか。私たちが、もし迷わないでずっと安定しているとするならば、それは学んでいないと言ってもいいかもしれません。

イエスの弟子たちが「天国でいちばん偉いのはどんな人ですか」と尋ねました。天国で最高に立派な人はどういう人だろうと思ったのです。それは学者だろうか、事業家だろうか、哲学者だろうか、いろいろなことを考えます。信仰の深い人を目指して、イエスの弟子にふさわしい者に自分こそならなければ、と思っていたのかもかもしれません。「いちばん偉い人はどんな人ですか」と尋ねるのは何か不遜なようですが、とても素直で忠実な問いだと思います。「どのようにしたらいちばんなのでしょう」。それは教師にとって一番いい問いだと思います。それを聞いて、そのようにしたいという生徒が一人でも多くなってほしいと思うのです。

イエスさまはその問いに対して、そこにいた子どもを真ん中に立たせて「この子どものようにならなければ天国に入れない。この子どもが天国でいちばん偉いのだよ」と仰ったのです。子どもとは単に年齢ばかりを指しているのではないでしょう。それは「迷う」ことを経験する存在だと思うのです。大人はあまり要求はしない。そこにじっといたいからです。しかし、子どもは何かを探して、冒険し、危険なものを恐れないで進もうとします。

黄金の羊

イエスさまは、よく羊や羊飼いを譬えに出してお話をされています。自分のことを小羊と言ったりします。今日、読んでいただきました聖書の箇所では、飼っている羊100匹のうち1匹がいなくなったらどうするか、という話がかかれています。皆さんはどうしますか。1匹いなくなったら探しに行きますか。大体は探しに行かないでしょう。私も探しに行きません。なぜならば、探しに行かないと言う人にとっては、そのような者がいなくなった方がいからです。そういう者が自分の群れの中にいない方が、素直で、ややこしくなく、スムーズにいくからです。生徒でもそうです。余計なことをする者を排除して、優等生を1番から100番まで揃えて進んで行こうとする。これが教育だということも当然です。だから1匹だけ迷い出た羊は、また1匹、どこから連れて来て補充すればいいのです。

私も学校の教師をしていたことがあります。学校には入学試験、そして判定会議があります。ギリギリのところにいる生徒を入学させるかどうか。すると学年主任や担任は「あ、その生徒は要りません」などと言う。私はその言葉がとても嫌でした。「その生徒、要りません」と言うのは忠実な教師です。成績は多少いいかもしれないけれど、面接をすると服装がだらしない、親の対応がなっていない、というような生徒が入学すると必ず問題を起こすことが分かっているからです。だから「要りません」と言うのです。皆さん、どうですか。1匹がいなくなったとき、99匹を残して探しに行きますか。

私は生徒たちに「どうする」と聞きました。「探しに行きます」と皆、真面目に言うのです。「僕は探しに行きます。聖書に書いてあるから。イエスさまが探しているのだから、探しに行きます」と、優等生は聖書に書かれたとおりのことを言います。「お前、偽善者みたいなことを言うな。絶対探しに行かないだろう。教師として自分の生活がかかってくることを考えると、自分のクラスにとっては、そういう奴は要らんぞ。退学や」。毎日そのような出来事が起こっていたものですから、私はそう言いました。生徒は皆ムキになって「キリスト教はそれでは困ります」と言います。私はできるだけ逆らってみようと「いや、キリスト教だって困るやつは困る」。すると一番後ろの方にいた一人の生徒が「先生、その羊は黄金の羊や」と。「黄金の羊なら探しに行くわな。黄金の羊なら99匹を放っておいても探しに行くで、そりゃ」。

天使に会える

では、聖書をもう1回読み直してみるとこう書いてあります。「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである」（マタイによる福音書18章10節）。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を100匹持っていたという話になっていきます。ただ羊飼いの話だけでなく、その前段には「小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」と書いてあります。「気をつけなさい」というのは、かわいそうだからではないのです。Watch your step―踏んづけるな、気をつけろ。さらに、そこへ行ったら神の御顔を仰いでいる天使に会えると言うのです。言い換えるならば、99匹が待っているまともな所では天使に会えない。その、はみ出し、迷い出た1匹が、この世界を変える可能性をもっているということです。そもそも、18章は「誰がいちばん偉いのですか」という話から始まっています。

フロンティア電子

福井謙一さんという京都大学などで教授を務めた方がおられます。福井先生は「フロンティア電子」という理論を打ち立てて、ノーベル化学賞を受賞されました。フロンティア電子とは何かと言うと、Aという分子とBという分子が合体してCという物質を作る。分子を分析すると原子、原子を分析すると核と中性子と電子に分かれます。物質はすべて、これらがついたり離れたりしてできているのです。原子爆弾や中性子爆弾は、中心にある核の平均が失われることでもつエネルギーを利用したものです。原子の真ん中は陽子、中性子から成る原子核で、その周辺には電子があります。そして電子よりもさらに外れたところにあるのがフロンティア電子なのです。

さて、フロンティアには「開拓」という意味があります。私は北海道に22年間いました。北海道には北拓伝というのがあって、小さな教会にはフロンティア伝道と呼ばれました。冬の寒いときに、その日、食べることさえ大変な炭坑の町で、開拓伝道が取り組まれました。ものすごく大変でしんどいのです。隣の家までが遠く、零下20度から30度にもなるような所で伝道するのです。信者は少なく、しかも80歳とか90歳のお婆さんなので、その人が休むと何もできないのです。この京都にいたら想像もつかないような現実があります。そういうところで伝道していくのがフロンティア伝道でした。

福井先生は、原子核の周辺にある電子よりもさらににはみ出たところに迷い出たフロンティア電子と、別の電子が回っているうちにくっついて新しい物質を作ると言いました。『朝日新聞』の「天声人語」には、このことを生命の歴史を見ても同様だと書かれています。生命は海にいて、80トン、90トンもあるような大きな恐竜が海をのし歩いていた。そしてそのような恐竜が小さい魚を追いかけて食べていた。追いかけられた魚は必死になって逃げ、海から川へのぼり、川から追い上げられて岸へのぼり、岸から上がったり下がったりすることでカエルのような両生類ができた。哺乳類はその後になって誕生した。陸は一番辛いところだったのです。つまり、陸というのは追いやられたものが切り拓いたところ、フロンティアだという話なのです。

未来を拓く者

福井先生の話もそうですが、私たちがこの世界を見たとき、新しい世界を切り拓いているのは誰でしょうか。それは大学教授でも、哲学者でも、偉い牧師でも、有産階級の立派な経営者でもない。ものすごく貧しい、見捨てられ、踏みつけられるような存在が、実は真理をもち、未来を切り拓くのです。

我々はそのような存在から目を遠ざけて、華やかなものに引かれます。私もそうです。しかしそれは、恐竜が大きくなりやがて滅びるような世界であり、そこには希望がない。迷わずにいたる99匹と同じなのです。本当にこれから私たちが何かをしよう、学ぼうと思うとき、必ずと言っていいほど「迷い」が起こります。私は仏教に非常に関心をもつ牧師もいますが、なぜだろうと思ったりすることもあります。そのような人たちは、真理に添えていきたい、自分に正直にありたいと思い、迷った人なのだと私は思います。迷うときには「お前なんか要らない」「ここには必要ない」と必ず言われます。大学でも、教会でも、地域社会でも、本当に大事なことを言い出したら、小さい者をみんな踏みつがして、力強い者・派手な者・強い者が支配する世界を作り、小さい者を確実に踏みつけて黙らせ、罰しようとする。しかし、そこに気をつけなさいということなのです。

山本宣治

同志社大学の教員であった山本宣治という人がいます。日本で初めて産児制限を唱えた生物学者で、優れた政治家でありクリスチャンです。宇治の花屋敷という旅館の息子ですが、彼は牧師になろうとしました。キリスト教を研究するなら、ぜひ山宣（やません）を研究してほしいと思います。山宣は本当に優れたクリスチャンです。治安維持法に反対したのは彼一人だけでしたが、そのときにそのような人と友だちになったら政府から睨まれるとして、彼と縁を切ろうとします。残念ながら同志社もキリスト教会も彼をはみ出し者とし、切り捨ててしまします。神学部も目を向けない。残念です。こういうことに対して目を向けない。そして皆から賞賛されることばかりを求める。毎年、宇治で山宣の墓前式がなされています。そこに集まるキリスト者はとても少ないです。山宣は言いました。「山宣ひとり孤塁を守る。だが私は淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから」。本当に神さまの御心をしっかり求めて、しっかりと見つめる人は淋しいと思わない。そしてイエスさまはそこで出会われる。そこで私たちとアメンと言ってくださる。

かつて、ある生徒が「黄金の羊や」と言いました。その通りです。私たちはまさに迷い出た1匹であっていいし、世の中から賞賛され、褒めそやされ、そして大きな栄光を手にする

ことを目的にはいけないのです。神さまの招かれる声を聴いて、そのときに、迷うのだということです。

最後に私の短い詩を紹介して終わりにしたいと思います。「川は曲がりながらも」という詩です。ひねくれた詩なのですが。

私は曲がっているのが好きだ
曲がっているほうがいい
そこにはやさしさがあるから
川は曲がりながら大海に入る
あの里この村を潤しながら
まっすぐだったら洪水になる
真理だってまっすぐじゃない
曲がりくねって一つのでき事になるのだ

私たちは迷った人、孤立して本当に泣いている人、そこに学ぶべきものがある。そこに聴くべき声がある。そしてまた、友になれるような私たちでありたいと思います。

2014年5月21日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録